CWA NEWS

会長あいさつ

千葉ウィスコンシン協会
会長　茂木 友三郎

平成24年最初のCWA NEWSの発刊に当たりご挨拶を申し上げます。

昨今日本や世界を取り巻く情勢は大変厳しいものがありますが、会員の皆様におかれましては、お元気でご活躍のことと思います。

また、日頃より千葉ウィスコンシン協会の運営や各種交流事業に格別のご理解・ご協力をいただいておりますことに、厚くお礼を申し上げます。

さて、平成２３年は東日本大震災や原発事故、台風被害など、大変不幸な出来事がありましたが、国内はもとより、世界中の人々による支援の輪が広がりました。ウィスコンシン州においても、姉妹県「千葉」を支援するため「日本救援プロジェクト」が立ち上げられたことは記憶に新しいところです。ウィスコンシンの友人の皆様方に対し、この機会にあらためて御礼申し上げます。２０年来の姉妹交流の積み重ねの中で着実に交流が深まり、こうした力強い絆を実感できたことに私自身心を熱くしており、関係各位のこれまでのご努力に感謝申し上げます。

昨年は、ウィスコンシン州からの使節団受け入れが延期になりましたが、６月に開催された定期総会後の交流会では、一昨年派遣された「文化・芸術」「バイオマス」「女性のつばさ」の各グループによる活動報告会を行いました。

また、１２月には会員交流事業として「養老渓谷バスツアー」、広報事業として「国際フェスタＣＨＩＢＡ」への参加、千葉ウィスコンシン協会ホームページのリニューアルなどを実施したところです。

本年は、野田市域を中心にして、ウィスコンシン州からの友好使節団の受入れを行うことにしています。おもてなしの心をもって使節団を受け入れ、千葉県の良さや県民の素晴らしさをアピールするとともに、幅広い分野において交流活動を推進してまいります。

皆様方のご支援、ご協力を引き続き賜りますようお願い申し上げます。

最後に、昨年ご逝去された沼田武元千葉県知事の姉妹提携へのご尽力に対し、あらためてその功績を称えますと共に、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

２Ｐ　ウィスコンシンの今（現地リポート）
　　ウィスコンシン大学院生　吉村亜弥子さん
３Ｐ　インタビュー
　　佐原発　篠笛奏者　片野 聡さん
４・５Ｐ　行ってみようウィスコンシン（冬のアウトドア編）
５・６Ｐ　富里市とメクオン市との交流
７Ｐ　追悼―故沼田武千葉県知事とウィスコンシン州―
８Ｐ　報告（バスツアー、国際フェスタCHIBA出展）

ウィスコンシンの今
—現地からの報告—

ウィスコンシン大学院生
吉村　亜弥子さん
千葉ウィスコンシン協会会員

今年のウィスコンシン州の冬は、例年よりも気温が高く、真冬にもかかわらず初春のような暖かさが続いています。私がウィスコンシンに住み始めてからもう十年以上経ちますが、こんなに暖かい冬は初めてです。昨年に続き、今年もウィスコンシン州はいろいろな「初めて」を迎えています。

２０１２年は、元日にウィスコンシン大学のフットボール部が大学の全米チャンピオンを競うローズ・ボールに２年続けての進出を果たしたものの、惜しくもその座を逃してしまったという出来事から始まります。

● 州知事リコールなど混乱が続く政治情勢

そして1月15日には、昨年11月から続いている現職スコット・ウォーカー州知事（共和党）をリコールする運動で、有権者の署名の提出が締め切られました。集められた署名は１００万以上で、現在も署名の審査が行われており、州内に緊張した状態が続いています。この請願が通れば、州の歴史上初めての知事のリコールとなります。

そもそも事の発端は、昨年１月の就任から１ヶ月後にウォーカー知事が提出した財政調整案（the budget repair bill）の内容にありました。警察官や消防士以外の公務員が負担する保険料や年金の掛金の値上げのほか、公務員からなる労働組合の団体交渉権の排除などを盛り込んだ、労働組合の実質上の存在価値を取り除く項目が含まれており、これが州全体を揺るがす大規模な抗議デモを引き起こしました。

州議会の建物の周りに集まり抗議する人々
写真提供：ティム・フランディー Tim Frandy

極寒のなか２か月ほど州議会議事堂の中や周りには様々なグループが抗議の群れを作り、全米ニュースにも何度も取り上げられました。結局財政調整案は可決され、他にも州内の財政や仕組みに変化を起こす行政体制がとられ、それに対する有権者の反感が今回のリコール運動の引き金となりました。このような大規模の抗議は、１９６０年代に起きたベトナム戦争反対デモの規模を超えるもので、州がウォーカー政権反対派と賛成派で２分されるかたちになりました。知事とともに共和党州議員４名もリコールの対象となっています。ウィスコンシンでは、昨年に続き今年も政治的に変動の多い年になりそうです。

● ハイイロオオカミ（the gray wolf）が絶滅危惧種の指定から解除

また、今年の1月末には、ウィスコンシンを含むアメリカ中西部北部に生息するハイイロオオカミ（the gray wolf）が絶滅危惧種の指定リストから外され、一般の狩猟が許可されることになりました。１９７４年より、絶滅危惧種の指定をされていたハイイロオオカミですが、近年その数も増え、家畜を襲うなどの被害も出てくるようになりました。家畜を守るため、という理由もありますが、趣味としての狩猟にも許可が出るようになることには反論が出ています。しかし、ウィスコンシンには、娯楽・食用の狩猟としてシカ狩りなどの伝統が残っています。オオカミに関しては今後の議論の発展が注目されます。

● 東日本地震・津波の被災者への支援

基金集めとして一羽２ドルの折鶴が大学の建物内に飾られた
写真協力：UW-Madison College of Letters and Science Notes and News Team　http://news.ls.wisc.edu/?p=6247

最後は日本と関係のあるニュース。昨年３月の東北地方太平洋沖地震・津波のあと、ウィスコンシン大学の学生（日本人留学生や日本語を勉強している学生）や、地元の日本人達が赤十字などの機関と協力して、昨年春に折鶴や手作りの日本食販売などを通して募金運動を行いました（Japan Tsunami Relief: http://jtr.rso.wisc.edu/index.html）。また、犠牲者や被害者が今後忘れられることがないようにとの願いから、昨年５月１０日には、一本のしだれ桜が大学の植物学部の庭園に植えられました。この庭園は、キャンパスの中心を突き抜ける大通りに面しているので人目につきます。今から数か月後に花が咲かせるかどうか期待されています。

佐原発　篠笛奏者　片野　聡さんへ インタビュー

香取市在住の片野聡さんは、２００５年に友好使節団の文化・芸術グループの一員として“佐原囃子”を紹介するためウィスコンシン州を訪問しました。現在は、篠笛奏者としてだけでなく、“佐原囃子”の魅力を伝える「佐原社中」や手話ライブバンド「こころおと」の活動にも関わっています。昨年は東日本大震災被災地支援のＣＤを創ったり、初のソロアルバム「Eternal Flow」をリリースされました。

――片野さんの演奏を聴くと、ゆったりとした流れとか郷愁といったものを感じますが、篠笛との出会いはいつですか？

小学校３年の時に父親から篠笛をもらったのがきっかけで、小中学校の６年間郷土芸能部で吹いていました。父親と一緒のお祭りの下座として、１７歳で笛方のリーダーとなりましたが、バンドなどの音楽活動もやっていて、ギター、ベース、ピアノなども独学で覚えました。

昨年出したアルバムは、利根の流れ、変わらないものの象徴を表現したいと考え、収録曲のタイトルを永遠の流れという意味の「久遠流」とつけました。

――ウィスコンシンに行ったことが篠笛奏者となるきっかけと伺いましたが？

ウィスコンシンでホストファミリーとの出会いがなければ、現在の活動はしていません。

２家族に大変お世話になったのですが、英語を話せず戸惑っていた私に、ホストファミリーの子どもたちが、簡単な英語で一所懸命に話しかけてくれました。また、篠笛で「アメージング・グレース」を演奏した時、笛でも心を通わせることができると気付かされ、自分には音楽があることを知った瞬間でした。

その年のクリスマスに笛の演奏をレコーディングしてＣＤを送ったのがきっかけで、ホストファミリーとは未だにお付き合いが続いています。３．１１の地震があった時にも、即メールをくれました。

ウィスコンシンで佐原囃子を演奏

――東日本大震災以降、被災地を支援する様々な活動をされていますね。

佐原の街がボロボロになって、何かをしなくてはとの思いから、避難所に行って炊き出しのお手伝いをしました。体育館に畳が並べられ、段ボールの衝立に囲まれて被災者が生活している環境にショックを受けました。こんな時に音楽が何の役に立つのかと思いましたね。５月に東北の被災地にも行きましたが、その時は演奏するより瓦礫を片付けた方がいいと思っていました。

演奏することが力になると感じたのは陸前高田市に行った時です。お年寄りが多く、お祭りが根付いている地域だったので、住民に促され「ラバウル小唄」を吹いたところ、お年寄りが泣いて喜んでくれたんです。

音楽で何か出来ればと思い復興支援のＣＤを出しました。

――篠笛奏者として心がけていることはありますか？

自分自身が何度も音楽で感動しているので、聴く人に喜んでもらわなければ意味がありません。喜んでもらうため、用意した曲も客層をみて変えています。独りよがりでは意味がありません。

亡くなった父親がポソッと言った言葉が今でも頭から離れません。父親が最後に退院した時、自分でお見舞いのお返しに行ったのですが、運転手の私に「顔を見せることで喜んでくれる人もいる。そういうことを忘れてはいけない。その労力を惜しんではいけない」と言いました。今思うと、命を懸けても息子に伝えたかったんだと思います。

江古田でのライブの様子

――これからの目標をお聞かせください。

バイオリンのイメージを変えた葉加瀬太郎さんを尊敬しています。篠笛の葉加瀬太郎になることが目標です。

癒しにとどまらず、お祭りだけでもない、篠笛でこんな音楽もできるのかと思われるように、表現の多様性にチャレンジしようと思っています。

そのため、今年の活動テーマのひとつは温故知新です。雅楽も勉強し、お囃子の古典である佐原囃子をもっと学ばなければなりません。気持ちをリセットして学び続けようと思っています。

※片野さんのホームページとメールアドレスは以下のとおりです。

http://tosp.co.jp/i.asp?i=satoshi82
kazamidori.sk.1105@gmail.com

行ってみよう　ウィスコンシン州

ウィスコンシン州は四季に恵まれ、一年を通してアウトドアを満喫できます。

ウィスコンシン州では1月の夜間にはマイナス20℃以下となることが普通で、このような寒冷の気候や、広大な自然を生かして、冬にはスキーやクロスカントリー、スノーボード、スノーモービル、氷上釣り、アイススケート、アイスボート、犬ぞりなどで楽しむことができます。州内に多数ある湖や池では、氷結して天然のスケートリンクが整備され、人工雪を利用したスキー場も各地でオープンします。

今回は、ウィスコンシン州において特色のある冬のアウトドアレジャーと、そのスポットを紹介します。

1　スノーモービル

世界的に有名なスノーモービルダービー

雪上を自由自在に走行できるスノーモービル。ウィスコンシン州には、22,000マイル（約35,000キロ）以上に及ぶスノーモービルのためのトレイルが整備され、「スノーモービル天国」となっています。

とりわけ、州北部のイーグルリバーは、「スノーモービル・キャピタル・オブ・ザ・ワールド」として知られるスノーモービルの世界的メッカです。同地のダービー・トラックでは、1964年以来、1月第3週に、「ワールド・チャンピオンシップ・スノーモービル・ダービー」という世界選手権が行われています。旧式から新式まで約1400台のスノーモービルが参加する大規模な大会で、毎年約3万人もの来場があるそうです。

なお、州内のセントジャーメインには、「スノーモービル・ホール・オブ・フェイム博物館」が設置され、ビンテージものを含む様々なスノーモービルの展示などが行われており、スノーモービルファンにはたまらない場となっています。

2　クロスカントリー

雪の積もった野山をスキーで駆けるクロスカントリー。大自然を散歩のように楽しんだり、時間を競ったり、その醍醐味は様々ですが、ウィスコンシン州にはトレイルが各地にあり一般に広く楽しまれています。

ウィスコンシン州ヘイワードには、88キロメートルに及ぶクロスカントリー用トレイルが整備された世界有数のスキー場があり、ここで開催される「アメリカン・ビルケバイナー」は北米最大規模のクロスカントリーレースとして知られています。毎年1月下旬に開催しており、レースのほかツアーなども実施され、世界各国から愛好者が集まります。

熱き雪上の競い合いアメリカン・ビルケバイナー

3　アイスボート（氷上ヨット）

氷上をスイスイ　アイスボート

風を受けて氷上を滑走するアイスボート。日本ではあまり知られていませんが、州南部のレイク・ジュネーブでは、冬になると氷上でボートを操る姿が見られるようになります。

とりわけ、湖畔のウィリアムズ・ベイは、「アイスボーティング・キャピタル・オブ・ザ・ワールド」として知られ、毎年、チャンピオンシップ・レガッタが開催されています。

なお、この地でおなじみのアイスボートは「スキーター」という種類のもので、これまでに時速254キロの最高速度を記録したことがあるそうです。

vol.4（冬のアウトドア編）

4 氷上釣り

ウィスコンシン州には15,000以上の湖があると言われ、釣りは気軽にできる人気のレジャーとなっています。また、冬になると、湖に厚く張られた氷にアイスドリルで穴を開けて釣る、氷上釣りを楽しめます。

各地の湖では、年中釣りを楽しむことができますが、ウィスコンシン州ヘイワードにある、「フレッシュウォーター・ホール・オブ・フェイム」は淡水によるスポーツフィッシングを振興する国際的な本部となっています。ここにある博物館は、グラスファイバー製の全長61メートルのマスキー（州の魚であるアメリカカワカマス）という魚を形どったユニークな建物で、グラスファイバー製施設としては世界最大だそうです。淡水釣りに関する歴史的に価値のある道具（ルアー、ロッド、リール、アクセサリー、モーターボート等）が保存されているほか、淡水釣りにまつわる世界記録等の収集、功労者への表彰記録や出版物の展示等を行っており、年間5万人以上が訪れるそうです。

こんな大物が釣れるのも氷上釣りの醍醐味です

特集 県内各地域に広がるウィスコンシン州との交流（3）

＜ボランティアがつなぐ富里市とメクオン市の絆＞

富里市では、「英語を話す市民を一人でも多く」という市長の方針を受け、富里国際交流協会を中心に国際交流の取組みが積極的に進められています。

国際交流協会の設立以来の念願であったホームステイ体験事業が始まったのは２００１年。この事業に当初から関わっている協会の河野昌子会長さんは、「富里側の強い思いを受け止めてくださった国際フォーラムの伊藤幸雄先生やレイクショアー中学校の当時の校長先生のお陰で事業が実現し、今に至っています。また、事業の企画から訪問先でのプログラムが、当協会とメクオン市の学校関係者・保護者など多くのボランティアで支えられており、長年の信頼関係がしっかりと結びついて良い結果をもたらしています。このように、ボランティアの絆によって１２年間も続いている事業はここだけかもしれません」と語っておられます。

中学生のホームステイ体験事業が始まった!

ようこそ 富里へ

ホームステイ体験事業の相手となるメクオン市は、ミルウォーキーの北にあり、野生のシカやリスが街中でも見られる美しい自然と人々の生活が調和した豊かな都市です。昼と夜の温度差が大きいため、中学生達が訪問する秋の紅葉は特に素晴らしく、野外スポーツも盛んです。

この事業が開始される前、富里市では、子どもたちで構成される“ことり合唱団”によるウィスコンシン州訪問やウィスコンシン州女性のつばさ団員による富里市視察訪問などがあり、ウィスコンシン州への関心が高まって

いました。そして、メクオン市との交流は、２０００年（平成１２年）にメクオン市長の親書が当時の富里町長に届けられたことが契機となり、翌年1月に第1回の中学生ホームステイ体験ツアーが実現しました。毎年行われているこのホームステイ体験事業は、２０１１年（平成２３年度）で第１２回に至っており、これまでのホームステイ参加者は総勢１２４名に上ります。そして、ホームステイを体験したことでその後中学校の英語教師になるなど、体験者の多くが英語関係の大学や仕事を目指しています。

一方、メクオン市側でも、２００３年にレイクショアー中学校の校長先生と生徒が初めて富里市を訪れ、ホームステイ事業が始まりました。次の２００５年には、ステファン中学校も加わり、現在、２校の生徒による富里市でのホームステイ体験が行われるようになりました。

さらに、富里市では、昨年10月にメクオン市内にあるコンコルディア大学で小学校教育を専攻するキルスティン・ハワードさんを実習生として受け入れ、約2ヵ月にわたり市内の小学校で英語活動をサポートしていただきました。帰国後、1月からミズーリ州の小学校の教師として勤務されているハワードさんは、「子どもたちに日本での素晴らしい体験を話してあげたい。自分が架け橋となり、富里とつながり続けたい」と語っています。

第12回アメリカ･ホームステイ体験ツアー（2011年）

第１２回となった平成２３年度のホームステイツアーは、市内の３つの中学校から２年生１１名が協会の引率者３名とともに１０月７日に成田空港を出発、１４日までの８日間の日程で行われました。生徒たちは、到着翌日から、ホームステイ先の家族と一緒にミルウォーキー美術館やシダーバークのドイツフェスティバルなどを見学し、打ち解けた雰囲気で９日（日）のパーティーに臨みました。１０日（月）には、レイクショアー中学校とステファン中学校で授業を体験したほか、メクオン市長やシンスビル村長も出席した歓迎会などのプログラムも用意され、生徒たちにとって密度の濃い日程となりました。

５日間のホストファミリーとの交流を通して、生徒たちは、アメリカの生活・習慣・文化に触れ、言葉の壁を乗り越えて他国の歴史や文化を理解することの大切さと目的に向かって一歩踏み出す勇気を学んだようです。

“国際人をつくる”という富里市の取組みは、これからも着実に実を結んでいくことでしょう。

ホームステイ先の野外パーティ

メクオン市の中学校で一緒に授業

4~6Pに出てきた地名の場所

追悼

―写真で偲ぶ“故沼田武千葉県知事とウィスコンシン州”―

昨年１１月沼田武元千葉県知事がお亡くなりになりました。

沼田武元知事は昭和５６年（1981年）から平成１３年（2001年）まで５期２０年間にわたり知事を務められましたが、在任中の昭和６２年（1987年）外務省を通じウィスコンシン州から姉妹提携の申し入れがあり、そのことがきっかけで現在の姉妹交流に至っております。

その背景として、当時、日本とアメリカ合衆国は貿易摩擦などで緊張関係にありましたが、アメリカの各州では経済大国日本との県・州レベルでの交流を通じ、経済交流を促進したいという意図があったようです。

平成２年（1990年）5月の調印式はウィスコンシン州マディソン市の同州政庁１階の円形広間で行われ、千葉県から沼田武元知事を始め議会代表者、経済関係者などが、ウィスコンシン州側からもトミー・G・トンプソン知事（当時）をはじめ関係者多数が出席しました。

調印にあたって沼田武元知事は、「千葉県とウィスコンシン州は多くの面で類似しています。両県州の絆をより強め、日米間の国際交流をより一層深めるよう貢献してまいりたい」とあいさつしています。

沼田武元知事はその後も機会をとらえウィスコンシン州を訪問しているほか、ウィスコンシン州からの使節団が来葉された折は交流の場を持つなどウィスコンシン州との友好交流に大いに寄与されました。

千葉ウィスコンシン協会は沼田武元知事の姉妹提携へのご遺志を継承し、今後とも幅広い分野での交流に向けて努力してまいります。

トミー・G・トンプソン知事（当時）と姉妹提携の調印（1990年）
後列中央が茂木現当協会会長

写真上　ウィスコンシン州政150周年記念祭で
設置された「茶道」会場で（1998年）

写真左　「わくわく県民まつり」に参加した友好使節団の
コーラスグループと交流（2000年）

晩秋の養老渓谷、房総の小江戸・大多喜、行元寺を巡るバスツアー

去る12月3日（土）、本州で一番遅い紅葉の名所・養老渓谷、房総の小江戸・大多喜町、いすみ市の行元寺を訪ねました。参加者は、昨年と同じ46名（会員14人、一般参加者32名）、内子供1名、外国人8名（米国人6名、中国人1名、韓国人1名）と国際色豊かで、帰りの車中は日本語と英語が飛び交うとても楽しい旅行となりました。

ドライブインの前で全員集合

しかし、この日は朝から大粒の雨。養老渓谷に着いた時には、雨も土砂降り。渓谷一番の見どころ・粟又の滝は、足元が滑りやすく危険なため、渓谷入り口の川べりを散策。篠つく雨のなか、渓谷に通じる墜道を通り抜けて橋の上まで来ると、増水した渓谷は、遊歩道まで水に浸かっていて、参加者は早々にバスに引き返しました。

それでも、昼食のドライブインに到着した時には雨も上がり、蔵の町・大多喜に相応しい白壁と瓦屋根の入り口の前で全員の記念写真撮影。昼食は、山芋のつゆと、ざるそば2皿、てんぷら、お寿司と典型的な日本食。外国人参加者は、This is Japaneseと思って食したのでないかなぁ？

大多喜は、家康の知恵袋・本多忠勝の城下町として栄え、いまも処々にその面影を残していて小江戸の風情があります。町の散策は、観光協会のボランティアが参勤交代の下級武士のいでたちで案内。大多喜城の内部や周辺の社寺に残る文化遺産の一部を見学。

土砂降りの中で散策

いすみ市の行元寺（ぎょうがんじ）では、住職の30分の説明後、波の伊八が彫った書院の彫刻を見学。千葉・房総にも、優れた芸術家がいたと感心。

日も暮れ真っ暗となった帰りの車中では、千葉やウィスコンシン、そして世界地理に関して英語と日本語で尋ねるクイズや、外国人の参加者も巻き込んだ余興で大いに盛り上がりました。

悪天候にもかかわらず頑張ったスタッフの皆さんに感謝。

追記：翌日の朝は雲一つない快晴でした。

国際フェスタCHIBAに出展

千葉ウィスコンシン協会のブース全景

去年１２月１１日（日）、「グローバルフェスタＣｈｉｂａ」に代わる「国際フェスタＣＨＩＢＡ」が千葉大学で開催され、千葉ウィスコンシン協会は下記のブースでの出展を行い成果を上げることができました。また、ウィスコンシン州の人気プロフットボールチーム「グリーンベイ・パッカーズ」の熱狂的ファンが応援の際に使うチーズ型の帽子「チーズヘッド」を被っての記念撮影も大変好評でご家族やお友達同士で楽しんでいただきました。

来場者からは、「ウィスコンシン州ってどこにあるの？」「ウィスコンシン州と千葉県はどういう関係なの？」という質問が投げかけられましたが、スタッフ一同懇切丁寧に説明しCWAをＰＲしました。

チーズヘッドをかぶって パチリ！

準備期間を考えると一日があっという間に過ぎてしまいましたが、こうしたイベントに参加し一般の方に接することの大切さを改めて感じた一日でもありました。

また、今回当初からボランティアの参加を得て企画、運営等を進めてきましたが、共に創る喜びを実感していただけたことを報告させていただきます。

出展内容

①前年度の派遣時の交流の模様やウィスコンシンの風景を、パネルやパソコンのスライドショーにより紹介

②千葉県初のプロバスケットボールチーム「千葉ジェッツ」をポスター等でＰＲ

③多くの皆様からご提供いただいたグッズやウィスコンシン州のＰＲ用に作成した「一筆箋」の販売

【編集後記】

ヤクルト・スワローズに在籍した青木宣親選手がミルウォーキー・ブリュワーズと2年契約を結びました。安打製造機として3度のセリーグ首位打者に輝く青木選手には、ブリュワーズの中心選手として、昨年あと一歩で実現しなかったワールドシリーズ出場への原動力になってほしいです。4月から始まる公式戦での背番号「７」の活躍が楽しみです。

発行所：千葉ウィスコンシン協会
発行人：森山茂男　　**編集**：広報部会
http://www.chiba-wisconsin.jp/
〒261-7114 千葉市美浜区中瀬2-6 WBGマリブイースト14階
（財）ちば国際コンベンションビューロー内
＊電話でのお問い合わせ　☎043-223-2394（千葉県国際課）